

## 丹波の人取川（丹南町・篠山町）

むかし、篠山川は橋もなく、水が浅いので舟を渡すこともできず、少し長雨がつづいて水がでるとでき死する者がふしぎに多いので「丹波の人取川」といって、旅人や土地の人々が恐れていました。

中でも、大山の一の瀬〈せ〉や岡屋のわたり瀬をこす旅人は、ここを非常に恐れ、無事に渡った時は、かならず国許〈くにもと〉へその事を知らす程でした。

「この川には、きっと主神〈ぬしがみ〉がすんでいるにちがいない。」

と思った氷上郡のある商人が、なんとかこの難を救おうと大願を起し、生駒〈いごま〉山の歓喜天〈かんきてん〉を信仰〈しんこう〉して一心においのりをしていましたら、ちょうど、十年目のある夜、夢に一匹の大蛇が枕〈まくら〉もとにあらわれていました。

「わしは、篠山川に棲〈す〉んでいる主神〈ぬしがみ〉である。おまえの信心の功德〈くどく〉によって心を改め、今から天上して自天竜〈じてんりゅう〉となろう。わかれにのぞんで、身の上を話そう。わしは、はじめ畑の三岳〈みたけ〉に棲〈す〉んでいたが、そこに役行者〈えんのぎょうじゃ〉がまつられたので、のがれて藤岡の東窟寺〈とうくつじ〉の岩屋へ移った所が、またもや、十一面観世音〈めんかんぜおん〉がまつられたので、仕方なく次は八幡淵〈はちまんふち〉に下って水中にすみ、東古佐の戎〈えびす〉が淵〈ふち〉、川北の孫兵衛〈まごべえ〉が淵〈ふち〉から、上は野間の弁天〈べんてん〉が淵〈ふち〉まで五か所をすみ家と定め、悪神となって、毎年洪水〈こうずい〉には大きななまずや鯉〈こい〉やうなぎとなり、あるいは杉の丸太となって、多くの人身御供〈ひとみごくう〉を取ってきたが、今からは瀬織津比売〈せおりつひめ〉となり、水難者は、一人もないようにするし雨乞〈あまご〉いの願いもきこう。これから十年間に、五か所の淵〈ふち〉は埋没〈まいぼつ〉するであろう。」  
といて、姿を消〈け〉しました。

すると、ふしぎにも、それから五年目に一番深かった八幡淵がかわらとなり、その他の淵もおいおい埋没〈まいぼつ〉していきました。

また、それから、水死者〈すいししゃ〉は一人もでなくなったし、かんばつ続きでたいへんみんなが困ったある年などは、雨乞いの祈祷〈きとう〉をしたら、たちまち雷鳴〈らいめい〉がとどろき、大雨が降ったといえます。

今も、一の瀬やわたり瀬には「川越安全〈かわごえあんぜん〉」とするした石碑〈せきひ〉が残っているし、京都の伏見東谷壺〈つぼ〉の滝〈たき〉には、「自天竜〈じてんりゅう〉大神」をまつたお堂があるという話です。

